●りんご

黒星病多い！ 見直し摘果で良品生産を！ 災害対策を万全に！

今後の気象情報に注意し、災害に備えましょう。
黒星病の果実病斑は、二次感染を防ぐため、園地に放置せず土中に埋めるなど適正に処分しましょう。

▼着果量の見直し

早めに見直し摘果を行い、樹勢に応じた適正な着果量とする。なお、場所によってはサビ果や変形果が多く見られる園地もあるので、これらに注意して作業を進める。

▼徒長枝整理

徒長枝が繁茂すると樹冠内の日当たりが悪くなるばかりではなく、薬剤の散布ムラが生じ、病害虫の発生源となるので、随時不要な徒長枝は切り取って処分する。

▼支柱入れと枝吊り

果実の肥大とともに枝が下がり始めるので、樹冠内まで日光が入るようにし、作業性や薬剤散布効率をよくするために、支柱入れや枝吊りを行う。支柱を入れる際は、スピードスプレーヤ（ＳＳ）の走行に支障がないように注意する。

▼草刈り

夏場はりんご樹と下草の養水分の競合が激しくなるので、草は伸びすぎない内に早めに刈り取る。なお、疫病の感染を防ぐため泥をはね飛ばさないようにする。
※特にダニ剤を散布する、２～３日前には、必ず草刈りを終わるようにする。

▼クワコナカイガラムシ対策

バンド巻きを実施した場合は、７月上旬（ふ化期）までに必ず取り外し処分する。
２回目のバンド巻きは、８月上旬に実施する。
７月上旬及び８月上旬に防除剤を加用する。発生の多い所は、胴木洗いをしないと効果が薄い。
ただし、農薬の安全使用基準（収穫前日数）は必ず守る。

▼腐らん病対策

夏場は病班の拡大が一時停止しているが、降雨により未処置病班から胞子が飛散し、来年以降の発生につながる。胴腐らん、枝腐らんとも発見次第直ちに適切な処置を行う。

▼ビターピット対策

今後、降雨量が多いと着果量が少ない樹や、樹勢が強い樹はビターピットの発生が懸念されるので、カルシウム剤を積極的に散布する。

▼これからの薬剤散布

薬剤散布の際は、農薬のラベルを必ず読み、使用基準、使用倍数、年間使用回数、収穫前日数を確認して下さい。

散布時期	基準薬剤		使用基準（収穫前日数）
7月半ば（7/11～15）	1. 展着剤 2. 有機銅水和剤（80） 3. ベンレート水和剤 又はトップジンM水和剤 4. フェニックスフロアブル 又はサムコルフロアブル	 1,200倍 3,000倍 1,500倍 4,000倍 5,000倍	 14日前 前　日 前　日 前　日 前　日
	※前回ダニ剤を散布しない場合は、ダニの発生に応じてダニ剤を散布する。 ※アブラムシの発生が多い場合は、ウララＤＦ、コルト、キラップのいずれかを加用する。		
7月末（7/26～31）	1. 展着剤 2. ダントツ水溶剤 3. ダイバワー水和剤 又はアリエッティＣ水和剤 4. （カルシウム剤）	 4,000倍 1,000倍 800倍	 前　日 前　日 前　日
8月半ば（8/11～15）	1. 展着剤 2. （コロマイト乳剤） 3. イカズチＷＤＧ 4. ナリアＷＤＧ 5. （カルシウム剤）	 1,000倍 1,500倍 2,000倍	 前　日 前　日 前　日
	注１）ダニの発生がない場合は、次回へ入れる。 早生種など収穫前日数に注意！		

※ベフラン液剤及びアリエッティＣ水和剤は他薬剤と混用する場合、最後に加用する。
◇ダニ剤は発生状況に応じて使用する。
※早生種（未希ライフ・きおう）には使用基準（収穫前日数）が適切な薬剤を使用する。

▼落果防止剤（ストッポール液剤）の使い方

使用上の注意

ア．ストッポール液剤は、葉から吸収されて効果を出すので葉に十分かかるようにする。葉摘みは散布４～５日後から始める。
イ．散布後７日間は収穫できない。
ウ．果実の熟度を進ませる傾向があるので、収穫を遅らせないようにする。
エ．本剤を２回又はそれ以上散布したり、極端な早期散布をしたり、又、着色増進剤等を併用すると果実の軟化や油あがりが著しく早まるので、基準以外の使い方は行わない。
オ．早生つがる（つがる姫・平賀つがる）は、普通つがると区別して落果防止剤を散布し、着色管理も区別して行う。

品種	散布時期	回数	倍数	散布量	摘要
未希ライフ きおう 早生つがる ［つがる姫 平賀つがる］	収穫開始予定日の15～20日前（８月10日頃）	１回	1,000倍（10ℓ当たり10mℓ）	350～400ℓ/10a	展着剤不要
つがる	収穫開始予定日の15～20日前（８/15～20頃）				

注）ストッポール液剤は、つくねいもに対して薬害が発生（奇形）するのでドリフトには十分注意する。

●トマト

灌水の目安

７月下旬～８月上旬	毎日～１日おき	１株当たり２ℓ
８月中旬～８月下旬	１～２日おき	１株当たり２ℓ
９月上旬～９月下旬	最終着果20日以降、裂果防止の為控える	

※降雨の日は原則として行わない。但し、降雨が２～３日続くようであれば追肥を行う。

追肥量の目安

使用方法	水量（ℓ／株）	肥料名：現物（倍数）／1株		
		e・愛菜	OK-F-1	スーパーノルチッソ
随時摘葉	3,000／株1.5	6.3kg（476倍）／3.15g	3.3kg（909倍）／1.65g	6.6kg（450倍）／3.3g
無摘葉	4,000／株2.0	8kg（500倍）／4.0g	4.2kg（944倍）／2.1g	10kg（400倍）／5.0g
使用時期	毎日～３日おき	通常の使用	３日以上の曇天続き	尾ぐされ多発時 ※速効性 カルシウムを補う。

▼通路灌水

５段果房開花時と７段果房開花時に、通路灌水と兼ねて通路にも追肥を行う。但し、７段果房の開花が８月中旬以降になる場合は行わない。

●ネギ

軟腐病が出始める頃になりますので、土寄せ時に防除を実施しましょう。
また、今年はネギコガ・ハモグリバエが急増していますのでほ場を見回り早めの防除を徹底してください。
軟腐病防除：オリゼメート粒剤（６kg／10ａ）
　　収穫後30日前まで、２回
殺　虫　剤：フェニックス顆粒水和剤
　　2,000倍、収穫７日前まで、３回以内
肥料の吸い上げが悪いほ場では、トップスコアリンなどの葉面散布を併用してください。
露地の25cm出荷する場合は、最終培土を出荷20日前までに行うこと。

●大豆

▼追　肥

大豆が窒素を最も必要とする時期は、開花期から子実肥大期にかけてであることから、開花期以降の窒素栄養状態を良好にすることで、落花、落莢を防止し増収につなげる。

▼追肥方法

生育状況を見ながら開花期の追肥を行う。

肥料名	施肥量（10ａ当たり）	追肥時期
ＬＰコート（40日）	６～８kg：現物	７月／中旬（最終培土）
硫　安	20～40kg：現物	８月／上旬（開花期）
尿　素	10～17kg：現物	

注意！
• ツメクサガ・ウコンノメイガ等の発生が多くなってくるため以下の薬剤を散布する。

散布時期	基準薬剤	回数	倍数	散布量（10ａ当たり）
７月中旬～７月下旬（７月10日～７月25日）	ブレバソン フロアブル	２回	4,000倍	100～300ℓ
	パーマチオン水和剤	３回	1,000倍	

• 葉が濡れている場合、肥料焼けが生じるので注意する。
• ＬＰコート追肥後は必ず培土を行い、生育促進を図る。
• 開花時に過繁茂で倒状の恐れがある場合や、開花時期が８月中旬以降になる場合は、追肥を中止する。

●メロン

▼防　除

着果後、アブラムシの防除にはウララＤＦ2000倍液、ダニとの同時防除には、マブリック水和剤2000倍液を散布する。

▼花びらの除去

果実の尻部に、花びらを残しておくと、雨の多いときに雑菌が付着し、カビが発生したり腐敗果の原因になるので、軍手などで、きれいに取り除く。
収穫７日～10日前には、バラ色カビ病の防除にダコニール1000の1000倍液を散布する。

▼収　穫

糖度15度以上とし、タカミメロンは、つる元のヘタの盛り上がりや苦土欠症状、着果後の日数などを総合的に判断し、試し切りを行い２～３回に分けて収穫を行う。
レノンメロンは、収穫時の判定が難しいが、着果後55日頃を目安にする。ヘタの周りの濃いグリーンが淡くなり、白っぽくなったら、確実に収穫できる。
収穫に迷った場合は営農指導員と相談して収穫しましょう。

●スイカ

▼防　除

着果時からソフトボール大以前に行うと、玉の肥大が悪くなるのでやらないで下さい。
着果後バレーボール大になったら、テルスター水和剤1000倍液とベルクート水和剤1000倍液を散布して、アブラムシ、炭そ病、つる枯れ病などの防除を行う。

▼葉面散布

生育の良いところでは必要ないが、樹勢を考慮して、着果30日以降は、アミグロー液肥800倍液を散布する。（高温時はヤケが発生しやすくなるので注意）
苦土欠等の葉色淡化が見られる場合は、トップスコア・リン1000倍液をご使用下さい。

▼収　穫

大玉は着果後43日前後に試し切りを行い、糖度は最低12度を目標にして収穫する。
小玉すいかは着果後29日前後に試し切りを行い、糖度は最低12度を目標にして収穫する。
雨が多いと炭そ病が出やすくなるので、アントラコール顆粒水和剤またはシグナムＷＤＧを散布する。

●水稲

「青天の霹靂」の玄米タンパク質含有率基準は6.4％以下！

追肥時期が幼穂形成期より遅れると、玄米タンパク質含有率は確実に高くなります。

▼水管理

生育時期	寒い日	暖かい日（暑い）	備　考
幼穂形成期	10cm程度で10日間		障害不稔の発生は平均気温20℃以下、最低気温17℃以下
穂ばらみ期	15～20cm	４cm程度で時々水の入れ換え	
出穂開花期	10cm程度	５～６cm程度で時々水の入れ換え	最高気温が25℃以下では開花・受精不良
登熟期	10cm程度	２～３cm程度で時々水の入れ換え	台風時は６cm程度
落水時期	湿田では出穂後20～25日 乾田では出穂後30～35日		

▼病害虫防除

◇葉いもち病
最低気温18℃を超える日が２日以上続いた場合や、最低気温が16℃以上に達していて朝露や霧の晴れない日が続いた場合に感染しやすい。
感染に好適な日が出現した７～10日後頃からほ場を見回って早期発見に努め、発生を認めたら直ちに茎葉散布剤により防除を行う。また、病勢の進展が止まらない場合、５日毎位に成分の異なる茎葉散布剤により薬剤散布を行う。

◇穂いもち病
○穂いもちは出穂直前、穂揃期の２回散布を基本防除とする。出穂直前とは走り穂が見えたとき、穂揃期はほ場の穂の８割が出穂した時期をいう。
○低温などにより出穂期間が長引いた場合は、穂揃期に達していなくても出穂直前散布７日後頃に薬剤散布し、散布間隔を空けないようにする。その後、穂揃期に達した時点で再散布する。なお、近接散布の場合は成分の異なる薬剤を散布する。

◇紋枯病
多発生が予想される場合や例年発生の多いほ場では、出穂直前の散布のほか、穂揃期にも散布する。

◇稲こうじ病
○穂ばらみ期の低温、日照不足、多雨で発生が多くなるので、このような気象条件で前年発生が見られた場合、必ず防除する。
○防除時期は出穂10～20日前です。

◇カメムシ類
○７月下旬から９月上旬までの草刈りは、カメムシ類を本田内に追い立てることになるので行わない。この期間に草刈りが必要となった場合には、薬剤散布後速やかに行う。
○本田での薬剤散布は、残効性の高い１回散布を基本とし、穂揃期～穂揃２週間後までに散布する。また、例年発生が多い場合は最終散布の７～10日後に追加防除しましょう。

薬剤名	防除適期
キラップ	穂揃期（～穂揃１週間後）
スタークル	穂揃１～２週間後
ダントツ※	

※粉剤を使用する場合、ダントツＨ粉剤ＤＬを用いましょう。

◇コバネイナゴ
畦畔付近で幼虫が多く見られる場合は、畦畔（農道、雑草地も含む）及び畦畔際２～３ｍに薬剤を散布する。

営農情報　お役に立ちます